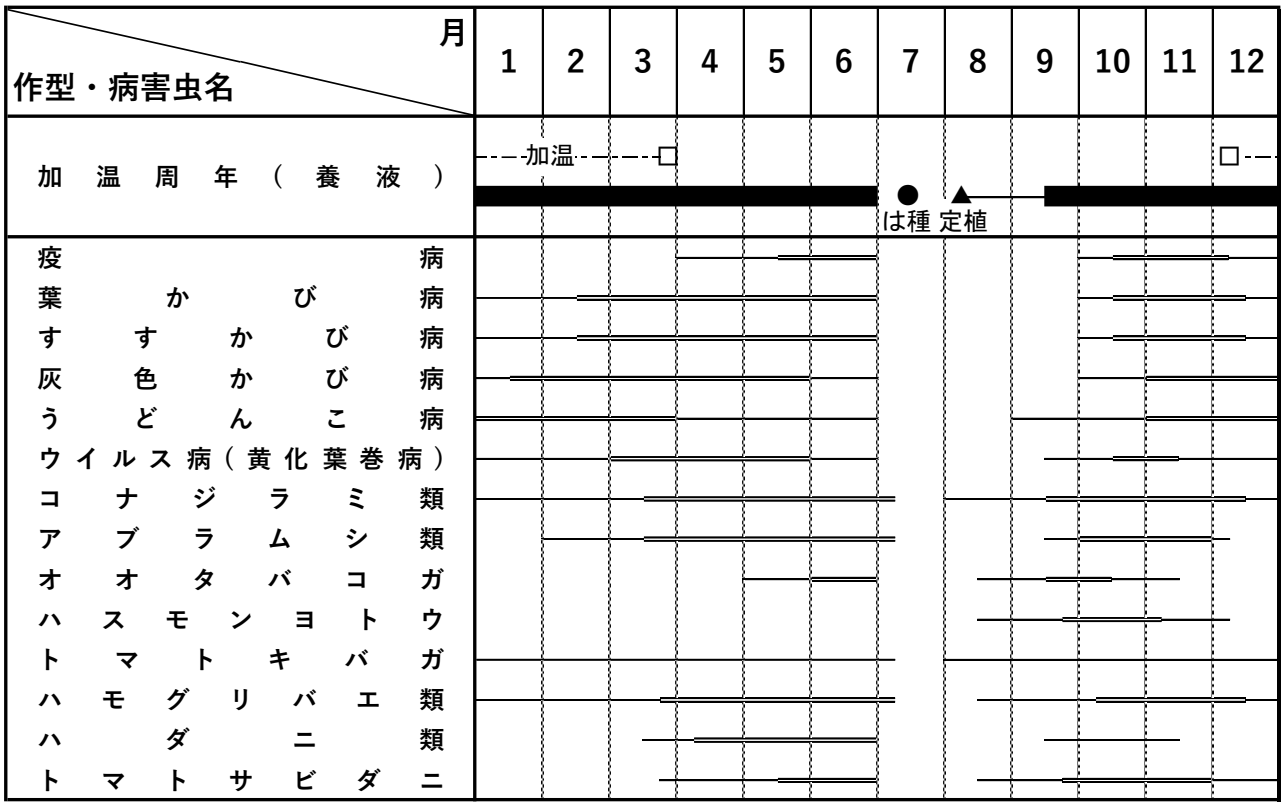
ミニトマト

農薬取締法上では、果実の直径3cm以下のものを「ミニトマト」としている。
「トマト」に適用があっても「ミニトマト」に適用のない農薬もあるので注意すること。
注）マルハナバチに対する農薬の影響は、ＸⅦ参考資料を参照。



疫病

留意事項

1 低温（20℃前後）で多雨が続くと、発病が多くなる。
2 予防的散布が大切である。
3 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
4 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 なす科作物(なす、トマト、ピーマン等)の連作を避ける。
2 被害茎葉・被害果は、早めに除去するとともに、被害株は収穫後、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 浸水を避け、排水を良好にし、窒素質肥料の過用を避ける。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ランマンフロアブル ＜２１＞【1000～2000倍　前日／4回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ピシロックフロアブル ＜Ｕ１７＞【1000倍　前日／3回】
・ペンコゼブフロアブル ＜Ｍ３＞【1000倍　前日／2回】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・プロポーズ顆粒水和剤 ＜Ｍ５＞ ＜４０＞ 【1500倍　前日／2回】
・レーバスフロアブル ＜４０＞【2000倍　前日／3回】
・ホライズンドライフロアブル ＜２７＞ ≪１１≫【1500～2500倍　前日／3回】

葉かび病

留意事項

1 過湿条件で発生しやすい。
2 多発時には防除が困難であるため、予防的散布が大切である。
3 草勢が衰えると発生しやすい。
4 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
5 ベルクートフロアブルは眼に刺激性があるので注意する。
6 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
7 すすかび病と病徴が似ているため、薬剤防除の際は注意する。

防除方法

1 密植を避ける。
2 施設栽培では、過湿にならないように、かん水、換気、温度管理に注意する。
3 被害葉は、早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 葉かび病抵抗性品種を利用する。
5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　前日／2回】
・ベルクートフロアブル ＜Ｍ７＞【4000倍　前日／2回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アフェットフロアブル ≪７≫【2000倍　前日／3回】
・トリフミン水和剤 ＜３＞【3000～5000倍　前日／5回】
・ホライズンドライフロアブル ＜２７＞ ≪１１≫【2500倍　前日／3回】
7 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）

すすかび病

留意事項

1 過湿条件で発生しやすい。
2 多発時には防除が困難であるため、予防的散布が大切である。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

3 ベルクートフロアブルは眼に刺激性があるので注意する。
4 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
5 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
6 葉かび病と病徴が似ているため、薬剤防除の際は注意する。

防除方法

1 密植を避ける。
2 施設栽培では、過湿にならないように、かん水、換気、温度管理に注意する。
3 被害茎葉は、早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　前日／2回】
・ベルクートフロアブル ＜Ｍ７＞【4000倍　前日／2回】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・パレード20フロアブル ≪７≫【2000倍　前日／3回】
・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000～3000倍　前日／3回】
・ニマイバー水和剤 ＜１０＞ ＜１＞【1000倍　前日／3回】

灰色かび病

留意事項

1 低温（20℃前後）で多湿時に発生が多い。
2 ベルクートフロアブルは、眼に刺激性があるので注意する。
3 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
4 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設内の換気を良好にし、過湿にならないように注意する。
2 開花後の花弁をとり、病原菌の侵入を防ぐとともに被害葉・被害果実を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・フルピカフロアブル ＜９＞【2000～3000倍　前日／4回】
・ベルクートフロアブル ＜Ｍ７＞【4000倍　前日／2回】
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ゲッター水和剤 ＜１＞ ＜１０＞【1500倍　前日／3回】
・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000～3000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ピクシオDF ＜１７＞【2000倍　前日／4回】
・ケンジャフロアブル ≪７≫ 【1500倍　前日／3回】
・カリグリーン ＜ＮＣ＞【800倍　前日／ー】
5 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）

うどんこ病

留意事項

1 乾燥条件で、気温20～25℃で発生が増える。
2 多発時には、防除が困難であるため、予防的散布が大切である。
3 ベルクートフロアブルは眼に刺激性があるので注意する。
4 SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
5 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 窒素質肥料の過用を避ける。
2 施設内では適度のかん水を行い、過乾を避ける。特に温風暖房を行うところでは注意が必要である。
3 被害茎葉は、早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　前日／2回】
・ベルクートフロアブル ＜Ｍ７＞【4000倍　前日／2回】
・イオウフロアブル ＜Ｍ２＞【500～1000倍　発病前～発病初期／ー】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・パレード20フロアブル ≪７≫【2000～4000倍　前日／3回】
・パンチョTF顆粒水和剤 ＜３＞ ＜Ｕ６＞【2000倍　前日／2回】
・カリグリーン ＜ＮＣ＞【800～1000倍　前日／ー】

菌核病

留意事項

1 気温20℃前後、多湿条件で発生が多い。
2 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 施設栽培では、換気に努める。
2 加温栽培では、夕方早めに加温する。
3 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・トップジンM水和剤 ＜１＞【1500～2000倍　前日／5回】
・ゲッター水和剤 ＜１＞ ＜１０＞【1500倍　前日／3回】
・パレード20フロアブル ≪７≫【2000～4000倍　前日／3回】
・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000～3000倍　前日／3回】
・ピクシオDF ＜１７＞【2000倍　前日／4回】

輪紋病

留意事項

1 施設栽培で発生が多い。
2 高温乾燥時に発生が多い。
3 予防的散布が大切である。
4 SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 なす科作物(なす、トマト、ピーマン等)の連作を避ける。
2 肥料切れしないように肥培管理に注意する。
3 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　前日／2回】
・ペンコゼブフロアブル ＜Ｍ３＞【1000倍　前日／2回】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ロブラール水和剤 ＜２＞【1000倍　前日／3回】
・ネクスターフロアブル ≪７≫【1000倍　前日／3回】

ウイルス病

留意事項

1 キュウリモザイクウイルス(CMV)やトマトモザイクウイルス(ToMV)、トマト黄化えそウイルス(TSWV)、トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)などがある。
2 キュウリモザイクウイルス(CMV)はアブラムシ類や病汁液によって伝搬される。
3 トマトモザイクウイルス(ToMV)は土壌や被害残さ、種子、病汁液によって伝搬される。
4 トマト黄化えそウイルス(TSWV)はアザミウマ類によって伝搬される。
5 トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)はタバココナジラミによって伝搬される。

防除方法

1 苗床は、寒冷しゃで被覆し、アブラムシ類及びアザミウマ類、タバココナジラミなどの侵入を防ぐ。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 アブラムシ類（キュウリモザイクウイルス(CMV)）、アザミウマ類（トマト黄化えそウイルス(TSWV)）、タバココナジラミ（トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)）の防除に努める。
4 ハサミ等による芽かきによりウイルスが伝搬する可能性が高いので、発病が疑われる株の芽かきは後回しにする。(キュウリモザイクウイルス(CMV)、トマトモザイクウイルス(ToMV))

コナジラミ類

留意事項

1 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
2 タバココナジラミはTYLCV（トマト黄化葉巻ウイルス）を伝搬する。
3 多発すると、すす病が発生する。
4 天敵寄生蜂のオンシツツヤコバチの放飼前後は農薬散布を控える。
5 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（但し、培土混和及びかん注は合計1回以内、育苗期の株元散布は1回以内、定植時の土壌混和は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内)。
6 ベリマークSCの成分シアントラニリプロールの総使用回数は5回以内（但し、定植時までの処理及び定植直後の株元かん注は合計1回以内、定植後の散布は3回以内)。

防除方法

1 施設の開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
2 栽培終了後、施設を密閉し、施設内の作物残さや雑草に残る虫を殺す。
3 発生初期に、天敵寄生蜂のオンシツツヤコバチを放飼する。
・エンストリップ ＜－(生)＞
【野菜類(施設栽培)　25～30株当たり1カード（50頭）　放飼　発生初期／－】
4 下記の薬剤を施用する。
・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【10g／培土1L　培土混和　は種前／1回】または
【1～2g／株　株元散布　育苗期／1回】または
【1～2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】
・ベリマークSC ＜２８＞
【400株当たり25ml　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】または
【400株当たり25ml　株元かん注　定植直後／1回】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アファーム乳剤 ＜６＞【2000倍　前日／5回】
・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　前日／2回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ディアナSC ＜５＞【2500倍　前日／2回】
・ベストガード水溶剤 ＜４Ａ＞ 【1000～2000倍　前日／3回】
6 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）

アブラムシ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
2 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計3回以内）。

防除方法

1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングする。
2 下記の薬剤を施用する。
・ダントツ粒剤 ＜４Ａ＞
【1g／株　株元処理　育苗期／1回】または
【1～2g／株　植穴処理土壌混和　定植時／1回】
・ベリマークSC ＜２８＞【400株あたり25ml　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・コルト顆粒水和剤 ＜９Ｂ＞【4000倍　前日／3回】
・トランスフォームフロアブル ＜４Ｃ＞【2000倍　前日／2回】
・モベントフロアブル ＜２３＞【2000倍　前日／3回】
・ウララDF ＜２９＞【2000～4000倍　前日／3回】

オオタバコガ

留意事項

1 多犯性で、多くの作物を加害する。
2 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。

防除方法

1 幼虫の捕殺は、被害軽減効果が大きい。
2 摘除した茎葉や果実にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場から持ち出し処分する。
3 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アファーム乳剤 ＜６＞【2000倍　前日／5回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　前日／2回】
・プレバソンフロアブル5 ＜２８＞【2000倍　前日／3回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

ハスモンヨトウ

留意事項

1 若齢幼虫の防除に重点を置く。卵塊や集団でいる時の防除に努める。
2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　前日／2回】
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞【1000～2000倍　前日／3回】
・アニキ乳剤 ＜６＞【2000倍　前日／3回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

トマトキバガ

留意事項

1 令和5年10月に特殊報を発出した。
2 トマト、なす、ピーマン、とうがらし類などのなす科植物で発生する。

防除方法

1 施設の開口部に防虫ネットを張り、成虫の侵入を防ぐ。
2 被害葉や被害果実はほ場に設置せず、速やかに持ち出し、適切に処分する。
3 発生を確認したら、下記の薬剤を施用する。

・アファーム乳剤 ＜６＞【2000倍　前日／5回】
・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　前日／2回】
・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　前日／3回】
・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　前日／2回】
・ダブルシューターSE ＜－＞ ＜５＞【1000倍　前日／2回】

ハモグリバエ類

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

留意事項

1 マメハモグリバエ、トマトハモグリバエなどが発生する。
2 施設内では一年中発生する。
3 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、5回以内（但し、培土混和及びかん注は合計1回以内、育苗期の株元散布は1回以内、定植時の土壌混和は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。

防除方法

1 育苗期の防除を徹底し、本ぽに被害苗を持ち込まない。
2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
3 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
5 下記の薬剤を施用する。

・スタークル粒剤、アルバリン粒剤　＜４Ａ＞
【1～2g／株　株元散布　育苗期／1回】または
【1～2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】

6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アファーム乳剤　＜６＞【2000倍　前日／5回】
・ディアナSC　＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・プレオフロアブル　＜ＵＮ＞【1000倍　前日／2回】
・ベネビアOD　＜２８＞【2000倍　前日／3回】

ハダニ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ダブルシューターSE　＜－＞　＜５＞　【1000倍　前日／2回】
・マイトコーネフロアブル　＜２０Ｄ＞【1000倍　前日／1回】
・サンクリスタル乳剤　＜－＞【300～600倍　前日／－】

トマトサビダニ

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アファーム乳剤　＜６＞【2000倍　前日／5回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

ーミニトマトー

・グレーシア乳剤　＜３０＞【2000倍　前日／2回】
・モベントフロアブル　＜２３＞【2000倍　前日／3回】
・マイトコーネフロアブル　＜２０Ｄ＞【1000倍　前日／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。